10 映画「どうすればよかったか？」から考える　日本のアンチスティグマ活動においてこれからなすべきこと（アンチスティグマ委員会）

6月19日（金）　14:45～18:10　M会場

司　　会	（川崎市健康福祉局）	今村 弥生
	（新宿神経クリニック）	渡辺 雅子
講 演 者	（Moving Images Studio Zou-shima）	藤野 知明
	（Moving Images Studio Zou-shima）	淺野 由美子
	（やきつべの径診療所）	夏苅 郁子
	（帝京大学医学部附属溝口病院精神神経科）	小口 芳世
メインコーディネーター	（川崎市健康福祉局）	今村 弥生
サブコーディネーター	（新宿神経クリニック）	渡辺 雅子

2024年12月から公開された映画「どうすればよかったか？」は、監督の藤野知明氏と、統合失調症を発症した姉と両親の家族の軌跡を描いた作品で、精神医療領域において話題になった作品です。本ワークショップではこの作品が日本社会に投げかけた意義と、これから我々精神医療者が社会に向けてなすべきことについて意見を交わす企画を申請します。映画は1983年から始まります。札幌市内で研究者の両親と姉弟の4人家族の家庭で、やさしく面倒見が良かった姉が24歳時になると統合失調症の症状が現れ、現実離れしたことを話すようになります。両親は姉を医療機関に連れて行きますが、医師である父は「診察した医師は全く問題ないと言っていた」と主張し、以後25年間、姉が精神疾患であることを否定し続け、精神科医療機関に通院させず、時に南京錠を使って自宅に閉じ込めていたこともありました。頑なに精神疾患を認めない両親の姿勢に疑問を感じた弟は、いつか医療機関を受診した時のために学生時代から姉の言葉や、家族の対話の録画を始め、その記録をまとめたものが本作です。作中で、姉が叫ぶ場面や自宅に監禁される場面が描かれますが、誇張も美化もされず、終始淡々とした様子で撮影されて、当事者家族の苦悩を暴露するような作品とは一線を画したもので、同時に、専門家の医療監修が入った作品からは決して出せないリアリティのあります。特に弟から病いを持つ姉へ、非難もせず、情に訴えるでもなく、率直によく吟味した最小限の言葉で語りかける場面は、精神科臨床の中での当事者にいかに関わるかという観点からも注目される場面です。しかし、監督は「この作品は姉の統合失調症発症の原因を追求するものではなく、統合失調症の症状を紹介するものもない。同時に、弟の立場から両親を批判するつもりもない」と、本作の冒頭で明言しており「この映画は姉の病気のことを扱ったドキュメンタリーではなく、受け入れ難い事実に直面した人の行動を描いた作品と考えていて、その上で『どうすればよかったか？』と問うている」と、インタビューに答えています。本作は公開後4ヶ月で観客動員数が14万人に達し、ミニシアター上映の作品としては記録的なヒットとなりました。観客は精神医療従事者が多かったのも事実ですが、医療福祉ともに全く無関係の映画ファンや一般市民も多く映画館に足を運んでいたそうです。本作がこれほど多くの人を惹きつけた理由は、統合失調症を精神医療の枠組みを外して、日本の社会で生きる普通の市民が困難に向き合うという目線で描いたためと考えられ、これは今後のアンチスティグマ活動にとっても重要な示唆を含んでいるという思いから、本ワークショップを企画しました。当日は本作の藤野知明監督と淺野由美子プロデューサーの登壇をえて、映画作品のアフタートークを模して、昨年アンチスティグマ委員会で作成した、高校保健体育教科書教材作成に携わった関係者と、精神医療者、そして精神障害当事者の演者が車座になり、本作から感じたことを話し合い、つづけて会場参加の学会員も巻き込んで議論をするインタラクティブなセッションにする予定です。また、第119回精神神経学会横浜大会に倣って、本作の上映会も企画申請したいと考えております。